

写真1 諏訪湖の御神渡り

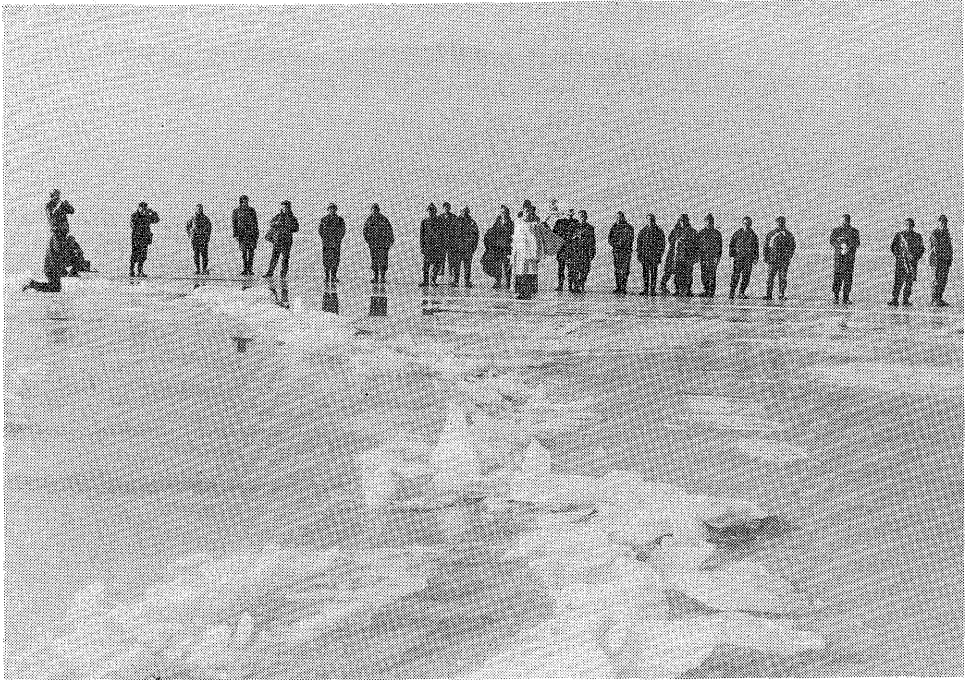


写真2 御神渡り拝観式

諏訪湖の御神渡り

三上岳彦

冬季、諏訪湖が全面結氷してから数日後に湖面の氷にき裂が生じ、裂け目に沿って氷が堤防状に盛り上がる現象を御神渡りと呼んでいる。その成因については諸説あるが、およそ次のように考えられる。まず、全面結氷した氷盤が夜間の放射冷却で収縮すると、氷の薄い部分に沿ってき裂が生ずる。次に、そのき裂部分に湧昇した湖水が直接寒気にさらされて凍結する際に膨張して盛り上がる。日中の昇温で氷盤そのものも膨張するから、き裂部分の氷は両側から圧縮されてさらに高く盛り上がる。このようにして、凍結した湖面上には延々と続く氷堤が出現する（写真1）。

古来から、御神渡りは諏訪明神が上社から下社の女神の所へ渡られた跡であるとされ、それができる位置や方向をもとにその年の社会の吉凶や作物の豊凶をうらなう儀式（拝観式）が今なお続けられている（写真2）。今年（1984年）の拝観式は1月29日に行なわれたが、例年にない大雪のため氷堤は雪面下に埋もれ、最近では見られない雪上の儀式となった。

諏訪湖の御神渡りの記録は14世紀末以来今日まで残されており、過去500年以上にわたる気候変動を知る有力な手がかりを与えてくれる。それによると、17世紀までは12月中に御神渡りのできる厳寒の冬が20%前後あったのが、18世紀以降は5%以下に激減している。とくに、近年は気候の温暖化に加えて、諏訪湖の水質汚濁や湖盆形態の人工的改変などの影響で結氷や御神渡りが生じにくくなっている。

（写真提供は浜 泰年氏）